

武藤勝彦氏を悼む

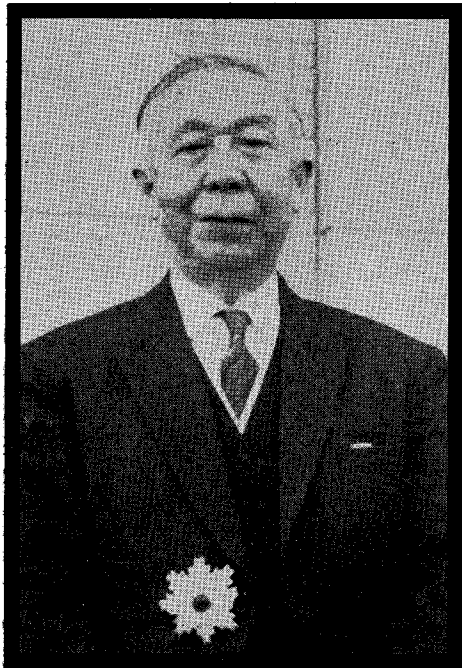
弔 辞

日本天文学会特別会員武藤勝彦氏は長らく建設省
国土地理院々長として測地学天文学の研究を指導され、
我国におけるこれらの分野の進展に多大の貢献を
されました。その上昭和27年から10年間の長期
にわたって日本天文学会評議員として本会の発展に
御尽力下さいました。このたび突然御逝去の報に接
して誠に痛恨の思いに堪えません。ここに本会を代
表して謹んで哀悼の意を表します。

昭和41年8月20日

社団法人日本天文学会理事長

広瀬秀雄



武藤勝彦氏を偲ぶ

坪川家恒*

元国土地理院長武藤勝彦博士は去る8月16日71才の生涯を終えられた。同博士は東京帝国大学理学部物理学科を卒えられ、しばらく山形高等学校教授として教鞭を取られた後、大正12年当時の陸軍陸地測量部に入られた。以来、昭和36年国土地理院長を退かれる迄社会生活の殆んどを国家的測量事業の推進および測地学の発展に捧げられたのである。

明治初期に測量事業が内務省から陸軍に移管されて、広域の測量と基本図の作製は軍だけの所管となった。しかしながら新興の意気旺盛な軍は少壮の軍人、技術者をヨーロッパ、主としてドイツに派遣して技術を習得させ、その直輸入の方法を良く活用し、30年前後の短期間に一等三角測量より開始した基準点網から5万分の1地形図を日本内地についてはほぼ完成したのである。殆んど人跡未踏の地域をも含むと思われる当時の国土をこのような短期間に正確に図化したことは誠に驚くべきことである。しかしながら、その反面ヨーロッパで多年にわたり発展させて来た技術の成果を直輸入しその利用にのみ邁進したきらいがある。また、地球の形をはじめとする測地上の問題が物理学、数学の第一級のテーマとして

論議された時代も漸く過ぎつつあった事情のためであらうか、広域測量の背景をなす測地学の導入は等閑視され、ついに我が国では大学に測地学本来の講座は開設されることがなかった。

武藤博士が陸地測量部に入られるころは漸く内国の地図が完成し一息つくと共に、今後の測地事業を如何に進めるかについて考え始めて来たころであろうと思う。軍人達も軍用図の調製だけに飽き足らず、その学問的裏付けの必要を感じ始めていたようである。国際会議としては最も古い国際測地学会には、毎回出席していた当時の陸地測量部長は特にそれを痛感させられたことと思う。筆者は博士の入部当時の事情の詳細をついに御本人からお聞きすることはできなかったが、当時の測地測量部長の要請に対し長岡、寺田教授の推薦によるものようである。測地測量は当時新しい学問として登場して来た地球物理学に対しても、特に必要であることを知られていた教授らが、軍人の管理下にある職域に卒業生を送るに当ってはかなり考慮を払われたことと思う。パイオニア的精神に富む有為の学徒であると共に、融和的人格を持たねばならないであろう。この点を考えると武藤博士の人選に当たった教授の明に敬服すると共に、この方面に関係する者として深く感謝するのである。

* 東大地震研究所